

直感力を研ぎ澄ませ！ 根付師 時田英明の挑戦

高校卒業後、将来の道がなかなか定まらず、
とりあえず英語の勉強をしようと訪れたニュージーランドで
ひとりの少年が人生を変えた。

それまで存在すら知らなかった根付師となり、天性の才能を発揮しはじめたのだ。
彼は、どうやって自分の眠れる才能を掘り当てたのか？

豪快な師匠との出会い、世界的根付コレクターからの絶賛と奨励。
不思議な縁もさることながら、「直感・即興・素直な心」という
時田英明さんの根付の世界に迫る――。

PROFILE

時田英明 | ときた ひであき

1979年、東京生まれ。1998年ニュージーランドに留学。この年根付彫刻と出会う。2000年日本人初の学生として、同国TAIPOUTINI専門学校翡翠彫刻学科に入学。2002年、帰国し、日本象牙彫刻教室(谷中)で象牙彫刻を学ぶ。2004年、神楽坂で初個展「グリーンストーン創作展」開催。2007年、「日本象牙彫刻会・新人賞」受賞。



新作「蟹」を眺める時田さん。彼はこの作品で日本象牙彫刻会・新人賞を受賞した。

高卒後、定まらない将来 会社の後継ぎとしての海外留学

ちょっとした出会いに縁を感じることもよくあるが、不思議な縁に導かれて人生が大きく変わることもある。日本に数十人しかいないといわれる根付の世界で大型新人として注目を集める根付師、時田英明さんの場合は、後者の典型的な例かもしれない。

江戸時代、風流な人々の間で大流行した根付とは、印籠などを帯から掲げるための留め具となる小さな飾り物で、今でいう携帯ストラップに近い存在。現在、コレクターは日本よりも海外に多く、時田さんもまた、留学先のニュージーランドで根付をはじめたという。

子どもの頃から、現在90歳を過ぎて尚達者な祖父が興した会社の3代目後継ぎになることを意識して育ったという時田さん。競争心がなく、点数で評価される学校の成績にも無頓着で、どこか風変わりな少年だった。美術の時間、漫画を描くという課題では、キュービー人形をバラバラにして油で揚げて料理するという内容を描き、「親や教師に、将来は犯罪者になるのではないかと訝しがられていました」という話も冗談ではないようだ。

しかし10歳の頃から、上に向かって流れる水や決して下りにはならない階段などで有名なエッシャー(※1)の騙し絵だけは大好きで、高校生のときはプラスバンド部の大太鼓の奏者として、音を奏でるおもしろさに目覚めた。その頃、心理学にも興味があり、心理学者に

なりたいたと思ったが、大学入試に失敗。「将来の後継者」として自分に目を向ける周囲からのプレッシャーは大きかった。そこで、考える時間を父から与えてもらい、まずは英語を勉強しようと、すでに数年暮らしていた兄が帰国する直前にニュージーランドへ渡ることになった。

根付を知らない恥が火付け役に 強烈なオーラを放つ師匠と出会う

縁は不意に人生の扉を叩く。時田さんは住み始めたニュージーランド第三の町、クライストチャーチの土産物屋で鯨、サメ、動物の骨で作った彫刻「ボーン・カービング」を目にしたが、「こんなのを売っていいのか？」と首を傾げるほどの粗悪品だった。ところが、なぜか兄の書棚にボーン・カービングの写真集が2冊もあり、美しい作品もあることに眼を見張った。もしそれらを見なければ「せっかく遠路はるばる来たのだから、この伝統文化に触れてみたい。できれば自分で作ってみたい」とは思わなかったかもしれないと、時田さんは振り返る。

ある日、語学学校の野外授業で訪れたボーン・カービングのアトリエでアーティストたちと気が合い、「日本人なら根付を知っているだろう？」と聞かれたが、答えに窮した。知らなかったのだ。その日を境に、英語留学が“根付留学”になった。図書館で根付について調べまくり、鯨がよく打ち上げられる海岸の話聞けば、根付の素材となる骨を収集するためその漁村へヒッチハイクで南下した。またある

時は、海岸で緑色の石を籠一杯拾い、鑑定してもらうために美術館を訪れた。

不思議な縁は続いた。

「その時美術館員が、偶然近くに住む翡翠彫刻家に連絡してくれました。しかし僕がトイレに入っている時に、その彫刻家が現れ、本物の翡翠をひとつだけ置いて、帰ってしまったのです。すぐに海岸で拾った石を籠ごと持ってその彫刻家を訪れたんですけど、ポケットナイフで石を削ってみせ、全部捨てろと言われました。その彫刻家はその後、10時間もしゃべりっぱなしでした。その日から、彼は僕の師匠になったのです」

師匠ミックは、大きな体格もさることながら、樹林のような髭に覆われた顔で「石に対して感謝しろ。石がどうして人の手に渡るのか。切っていい石、悪い石がある。金だけじゃないんだ。お前をへんな商売に行かせたくない」と、教え込んでくれた。大切な心がけだった。ミックのもとに集まる人々もまた、強烈なオーラを放つ人ばかりだった。

「人生の中で、これだけ濃い人々に集中して会うことはもうないだろうというくらい、性格も人生観も常識を外れている。お金なんて儲けなくても、迷わずに堂々と生きている。そんな人たちに出会ったからか、僕もまた、お金がないほうが仕事に身が入るんですよ。やらなきゃ食べていけないというプレッシャーがいいんです」と、時田さんは笑う。



鹿角(かづの)。これから根付になるのを待つ材料だ。

「蟹」の正面。素材は象牙で、眼は鉄。
幅は約5cm、厚さ2cm、甲羅の長さは2.5cm。



「蟬」。素材はカバの牙。眼は琥珀。眼裏にアワビを象眼し、さらに金箔と漆を塗って奥行きを持たせる加工をした。

初期の作品「蟹の手」。素材はイノシシの歯。
その右隣は、桃の種で作った「顔」。



牛骨で作った人の“顔”シリーズ。不気味な表情がマニアに好評。

根付(ねつけ)とは何か

「根付」は巾着、印籠、矢立、煙草入れなど、いわゆる提物を帯から下げる時に使う滑り止めの道具である。帯の下から上に通し帯上で浮かせるため、布を傷つけないように丸みを帯びた形にする必要があり、題材やデザインが豊かに発展してきた。

「根付」の語が書物に登場するのは、寛文11年(1671年)。海外の美術館・博物館によるコレクションは大量で、大英博物館だけでも2千点に上るといわれる。象牙の使用に関しては、日本の伝統芸能を絶やさぬ目的から日本象牙彫刻会が結成されている。名誉総裁は高円宮妃久子殿下。ワシントン条約の定める国際的な象牙取引に抵触せぬよう、関係者は登録申請をするなど規制を遵守している。

こうして出会い、彫り始めた根付は世界でもトップクラスの根付コレクターにも注目され、「お前は将来、絶対に根付界に欠かせぬ人材になる」と励まされた。

直感・即興・素直さを出し切って “この音”をこぼさぬように彫刻

「観察する時間は、教わっている時間と同じ。たかが葉っぱ一枚でも、何かを得ようとする努力で、何かが得られる」と感じる時田さんは、数学が「数楽」だったらよかったのと思う。公式を丸暗記する数学ではなく、数の楽しみ方を知る勉強をしたかったと思うのだ。というのも、根付のデザインを始めてから、エッシャー的な要素が自分の作品にも不可欠だと痛切に感じるようになったからだ。数の世界を楽しんで絵にしようえ、それが人にちゃんと伝わるエッシャーの凄さを再発見したという。

「自然の中に隠された数学の法則を見出す直感力。音楽という即興性。自分の中にある素直さという自然。これらを出し切った時に、僕にとって面白いものができるんです」と時田さんは説く。以前、自分に対してストイックに作品を作った時、大変だという気持ちが作品に出てしまい、それが相手にも伝わってしまったことがあった。それを克服しようと自分の精神と駆け引きをするうちに、素直な心に自分をゆだねる術が身に付いていった。

その術とは、時田さんの言葉を借りると、こうだ。「太鼓を叩いている時、『この瞬間にこの音があればいいのにな!』と思うことがあります。

たかが葉っぱ一枚でも、
何かを得ようとする努力で、
何かを得られる



「自分の道が見つかったことを、父がいちばん喜んでくれました」と話す時田さん。ペンダントも自作の翡翠彫刻。

その微妙な音を追求する感覚が、0.1ミリの穴で表情が変わってしまう作品を仕上げる時にもわきあがるんです。「この音だ!」という直感をこぼさないように鑿(のみ)を素材の上に滑らせる時、自分の要求は不必要なんです」

自然界のコピーでは作品にならない 素材の語りかけに耳を研ぎ澄ませます

今春のことだ。次の作品を作ろうと台形の象牙を手にとった時に浮かんだイメージは、「蟹」。そのまま車のハンドルを取り、海に向かい、浜辺で蟹を採集した。作業台に置かれた蟹は風にさらされたちまちミイラとなった。ミイラに習って一心不乱に彫り続けた。精巧な蟹は、今にも動き出しそうだった。ところが、時田さんは知っていた。

「自然界を超えることはできないんです。作られたものは単なるコピーだから。僕の作品にするには、独自の匂いを出さなければならないのです」

象牙の蟹が何かを語りかけようとしている。その語りかけに耳を研ぎ澄ませます。動かぬ蟹と対峙する夜が続く。何かを加えるべきなのだが、それは何か。時田さんは、本物の蟹にはなかった

3つの小さな穴を甲羅に彫り、そこに金を埋め込むことにした。一晩かけて作業した作品をなじみの陶芸作家に見せると、こう言われた。「金が目立ちすぎるね。自分も感じていたことを指摘されて、ひらめいた。「金を潰して燻そう」。こうして完成した作品は、時田さんに新人賞をもたらした。

現在、丹沢山の麓の古民家を借り、昼はパン屋のアルバイトに励む。澄んだ水と空気に誘われてやってきた足柄平野で、多くのアーティストや仲間たちに出会った。空いた時間に彼らと農作業にふけったり、石や骨と対話したりする。テレビはない。

「石に感謝」という師匠の言葉が、どこかで根っこを張っているんですね」と話す時田さんは、自分をぎりぎりに追い込みながら直感を研ぎ澄ます生き方に迷いがないと、心境を語ってくれた。

Text by : 山上郁海

※1 マウリッツ・コルネリス・エッシャー(1898~1972年)。建物の上部に向かって流れる水路、階段を上りきったら階段の一番低いところになる階段などの騙し絵で有名なオランダの画家。不可解な構図を持つ建物の絵や、魚、鳥、トカゲをモチーフにした幾何学的デザインなど、数学的要素をふんだんに取り入れた作品が多い。